

## イワン・キリエーエフスキーによる 西欧近代化の反思（上）

「ヨーロッパ文明の性格とそのロシア文明との関係  
(E. E. コマロフスキー伯爵あての手紙)」 試訳

Reflection on the Western Modernization by Ivan  
Kireevsky (part 1)

Translation of 'The character of European civilization and its  
relation to Russian civilization'

福島 仁

Hitoshi FUKUSHIMA

### 序

「西方の衝撃」は世界を覆い尽くしたが、その始まりはどこにあるのだろうか。他者からの衝撃を自覚的に受け取る受容者がなければ思想の面での衝撃はあり得ないことを考慮すると、それはヴォルテールの『哲学書簡』にある。クウェーカー教徒やソツィーニ派の宗教的権威者を持たず、自己自身の良心を指針とする宗教生活でもって、国家体制と結託したカトリック教会を批判し、つまり靈魂の自由から旧来の体制を批判する。イギリス議会制度と政治の賞賛はフランスの専制体制を批判する。ジョン・ロックの唯物的精神観、経験主義哲学によってカトリック神学とデカルト派の人間観を批判する。数学によって計算可能な力学の自然観にたよりデカルトの自然哲学を批判する。チェンバースの『百科辞典』の仏訳を通して『百科全書』派が形成されたように、これらはフランス内部にフィロゾーフという名の信奉者を生み科学、政治、社会体制の転換をせまる。ヨーロッパ大陸に浸透するにつれ

フランスでもドイツでもそれ以外でも反感と論争が起こり、地球を半周して波のように日本にまで到達する。そこここで生じた旧来の文化、思想、社会の反発や論争の中であって、最も西欧の言語、思想、社会そのものまで知悉した人々は19世紀ロシアの知識人であろう。彼らのなかで西欧への反発とその対処に際だった特徴をしめすのがスラブ主義者である。西欧を知り抜いた上で、その欠点を指摘し、ロシア伝統の要素を評価した彼らの思考の筋道は、日本や中国の知識人、康有為や章炳麟、「中国本位文化建設」を主張する論者、現代新儒家を解釈する手がかりとなるのではなからうか。つまり、世界全体が西欧近代化に動いているなかで、なぜ伝統要素にかくもこだわるのか、という基本的疑問に答えるのではないだろうか。

イワン・ヴァシリエヴィチ・キリエーエフスキー（1806－1856）は草創期のスラブ主義者の代表である。1852年に『モスコフスキー・スボールニク』（モスクワ論集）に掲載した論文を訳出する。日本はロシア船が下田に来航し、中国は太平天国のただ中であつた。使用したテキスト、執筆の経緯、等細部は次回に書きたい。

### 「ヨーロッパ文明の性格とそのロシア文明との関係（E. E. コマロフスキー伯爵あての手紙）」

先回お会いした際、あなたとヨーロッパ文明の性格とロシア文明との差異について随分語り合いました。ロシア文明は古代においてはヨーロッパ文明の一部であり、その痕跡が今でもふつうの民衆の風習、習慣、思考様式に現れているだけでなく、いわばあらゆる精神、ものの考え方、こう表現してよければ、まだ西欧的教育で改造されていないロシア人の内面構造にまで入り込んでいます。あなたは私がこのテーマに関する考えを文章で述べることを求めていらっしゃいました。けれどあの時はあなたの望みを実

現できませんでした。『モスコフスキー・スボールニク』に同じテーマで論文を書かねばならなくなった今この時、あなたにあてた手紙の形を取るのをお認めください。あなたと語り合った考えが、私の非現実的考えを暖め、蘇らせてくれたのです。

いうまでもないが、現在、ロシア文明と西欧文明との関係という問題より重要な問題はほとんどない。それ故、これが我々の頭の中でどのように解決されるのかは、我々の文学の支配的傾向だけでなく、おそらくはすべての精神活動の傾向や個人の生活の意味や社会関係の性質に関わってくる。だが、この問題がほとんど解決不可能だったか、あるいは、同じ事だが、困難さを提起するほどの事もないくらい簡単に解決されたのはまだそれほど昔ではない。一般的見解は、ヨーロッパ文明とロシア文明の間の違いは、ただ文化の発展段階にあるのであって、文化の性格、さらには本質、つまり文化の根本原理にあるのではない、というものだった。我々は（当時はこう言われた）以前は無知でしかなかった。我々の文化は知的進歩の面でいつも先んじていたヨーロッパを見習い始めたときから始まった。かの地で学問が開いたが、我々にはまだなかったときである。かの地で学問は成熟したが、我々のところでは芽が開いたばかりの時だった。だから、かの地は教師であり、われわれは生徒だった。とはいえ、ふつう自己満足でもって付け加えられるのだが、生徒は十分に賢いので、急速に学び取り、きっとすぐに先生に追いつくだろう、と。

「諸君、誰が想像し得ただろうか」と1714年にリガでピョートル帝は新しく進水させた軍艦の上で杯を上げて語った。「この30年で君たちロシア人がここで私とともにあって、バルト海で軍艦を建造し、ドイツの服装をして宴会をしているだろうなどと誰が想像できただろうか」彼は付け加えた。「歴史家はこう考えるだろう。古代の学術の中樞はギリシャにあり、そこからイタリアに

移り、ヨーロッパ全土に拡がったのだ。だが、我々の祖先の無教養がそれがポーランドより遠くへ進入するのを邪魔した。ポーランド人も以前は同じ蒙昧の中にあり、ドイツ人もはじめはみなその中にあり、我々も今まではその中に止まっていたのだけれど、自分たちの統治者の弛みない努力のおかげで彼らもとうとう目を開き、ヨーロッパの知識、芸術、生活様式を習得できた。こういう学問の地理的移動を私は人体の血液循環にたとえたい。そして、学問はまたイギリス、フランス、ドイツの滞在地をいつの日か立ち去るのだが、数世紀後にはわが国にやって来て、その後、また自らの故郷であるギリシャに戻っていくためにだ、と私には思われる」

この発言はピョートル帝が働いていたときに持っていた熱中を示しているし、多くの点での彼の極端さを正当化するものでもある。文明への愛が彼の情熱となった。文明の中にのみ彼はロシアの救いを発見したが、そのみなもとはヨーロッパだけに見出された。だが、彼の信念は、教育を受けた、あるいはより正しくは彼によってその人民を完全に教育して作られた階級の中に彼よりまるまる百年長く残った。そして、30年前には西ヨーロッパからの借用以外に、他の文明の可能性を思いついたかもしれない思考力を備えた人物に出会うことはおそらくありえなかったのだ。

ところが一方で、その時から、西欧文明とヨーロッパ式ロシア文明の中で変化が起っていた。

ヨーロッパ文明は19世紀後半に発展の最高潮にいたった。そこで多少とも観察力を備えている識者たちにとってその特有の意義がはっきりとした明瞭さを伴い現れてきた。しかし、この発展の最高潮と、この結論の明瞭さの結果はほとんど全般的な不満と裏切られた望みの感情だった。西欧文明が満足できなくなったのは、西欧において学問が生命力を失ったためではない。反対におそらくいかなるときよりもっと隆盛になっていた。様々な外面の

生活の形式が人々の関係を支配したり、あるいは、人々の有力な傾向への発展を妨害したためではない。反対に外部の障害との闘いは好ましい方向への愛着を強めただけで、おそらく外部の生活と人々の知的欲求とがそれまでよりおとなしくかつ協調的に折り合いをつけたことは決してなかったのである。しかし、不満の感情と見通しのない空虚感が、狭い一時的関心の範囲に思考は止まることのなかった人々の心に広がっていたのは、まさにヨーロッパの知性の成功そのものがその根本的志向の一面性を見せていたためである。学問における個々の発見や成功の豊富さや、こう言ってもいいだろうが、巨大さにもかかわらず、知識の総体から導かれた全般的帰結は人間の内面の意識にとって否定的な意味しかもたらさなかったからである。改善された外面の生活の華やかさ、快適さにもかかわらず、生活そのものは本質的思想を欠いていて、根本の力のある確信によって広まったのではなかったのも、その生活が高い望みにみたされてもいなかったし、深い賛成で力づけられてもいなかったからなのである。数世紀の冷静な分析が発展の始まりからヨーロッパ文明が依って立つ基礎を破壊し、それゆえ本来のヨーロッパ文明が育った根本原理が最近の結果とはそれにとって関わりもなくなじみもなく対立するようになった。その一方ではこの甚だしくその基礎を破壊する分析、独りでに動いていく理性の刃、この抽象的推論、自らと個人の経験以外には何物も承認しないこの独断的悟性、はいかにしてにヨーロッパ文明の本物の財産だということになったのだろうか。または最も粗雑で初歩的な感覚与件以外のあらゆる他の人間の認識能力と結びつきを絶ちながら、自分の空っぽな弁証法の体系を感覚与件だけの上に打ち立てているこの論理的な活動をより正確にはなんと呼ぶべきなのか。

しかし、初期の明らかな破壊的な理性優先の成果のときに不満と絶望の感情が西欧の人間に突然現れ出たのではない。長年の信

念が覆った後、西欧人は抽象的理性の万能に信頼をおけばおくほど、ますますより大きく、より強く、より幅広くその信念は西欧人により破壊されていた。成功の初めの時期には歓喜が後悔と入り混じっていなかったのみならず、反対に自己過信に酔って何か詩的な熱狂まで至った。自己の抽象的思考でもって今こそ新しい理性的生活を創造し、抽象的思考で完全に教化された地上に天国の幸福を作り出すことができる、と西欧人は信じたのだ。

恐ろしい血なまぐさい経験も西欧人をこわがらせなかった。大きな失敗もその希望を冷まさなかった。一部の苦しみも判断力を失った彼らの頭の中では殉教者としての榮譽をいや増すばかりだった。おそらく長々と続く成功しなかった試みもただ彼らをうんざりさせただけで、自信を失わせはしなかったのかもしれない。もし彼らが信頼していたその自らの抽象的理性が自分自身の進歩の力によって限られた一面的なものだという自覚に至らなかったとしたら。

この西欧的教養の最新の成果は確かにまだはるかに全面的に実行されたわけではないが、おそらくは先進的な西欧の思想家たちのあいだですでに支配的になりはじめていて、最新のそしてたぶん最終的な抽象的哲学的思考の時代に所属しているものである。けれども哲学の見解はしばらくは学術的教壇の中での財産に留まっている。今は書齋の思考から出た帰結であるものが、明日は大衆の確信となるであろう。なぜなら合理的科学への信頼以外にはほかのあらゆる信念から引き離されていて、また自らの理性の帰結以外にはほかの真実の源泉を認めない人間にとって、哲学の命運がすべての知的生活の命運となっているからである。その命運にすべての哲学と人間生活上の見解とが集中し、共同体意識の一つの中心点に結びついているというだけでなく、その中心点、その共同体意識からさらに支配的連鎖がすべての科学と人間生活上の見解に発出し、それらに意味とつながりを与え、各自の傾向

を形作る。それ故に、しばしば我々は次のようなことを目にする。ヨーロッパの一隅で周囲の大衆からわずかに際だった人物である科学者の誰かの頭にわずかに際だった思想が成長し、二十年後にはその大したこともない人物の大したこともない思想が何かはつきりした歴史的出来事のときに大衆の前に現れ、かの同じ大衆の知恵と願望を操縦する。

(未完)